

# 橋本俊詔「格差社会」

## 第4章 格差のゆくえを考える

# 1 格差拡大を容認しても大丈夫なのか

- 小泉元首相の発言  
「格差の何が悪い」「格差が拡大してもいいではないか」
  - 経済効率が重要
  - 経済効率のため不平等が増えることはやむを得ない
- 経済効率のためには格差拡大はやむをえないのか  
効率性と公平性のトレードオフ
  - 効率性のためには公平性が犠牲になっても仕方がない

[有能な人、頑張った人に高い報酬を与える場合]  
所得再分配政策 → 高額<sup>の</sup>税を課す

  - やる気を削ぐ、経済効率の低下、社会が活性化されない

[普段の倍の所得を与えた場合]

経済効率あるいは努力の程度は比例するのか？



比例しない

### 収穫逡減の法則

有能な人に高い所得を与えたとしても、それから得られる経済への効果は、ある程度限度がある

公平性を犠牲にすることが、必ずしも効率性を高めるとは言えない

## 2 貧困者の増大がもたらす矛盾

- 貧困者の増大は社会にとってもマイナス
  - 経済効率の問題  
低所得労働者の増加は経済の活性化にとってマイナス
  - 貧困者が失業者  
人材を有効に利用していない、人的資源をムダにしている
  - 犯罪  
貧困者や弱者の増加 → 犯罪の可能性を増やす
  - 社会の負担の増加  
貧困者の増加＝経済負担援助の増加
  - 倫理的問題  
格差社会が拡大することにより、勝者や敗者が固定され、いじめが社会的に定着する恐れがある

- アメリカ社会における犯罪と災害のリスク  
ゲートッドマンション: 富裕層が自分たちの住むコミュニティを実際に壁で囲み、そのコミュニティ外の者を入場させる際には厳しくチェックを行う  
-格差が拡大し、犯罪が増加したことが背景としてある

貧富の格差の拡大＝犯罪の危険性と隣合わせ

- アメリカの健康格差  
貧困者 → 早死に      金持ち → 長生き  
保険制度が充実しておらず、たとえ病気になっても治療代も払えず、満足な治療が受けられない

# 3 ニート、フリーターのゆくえ

- ニートの現状

NEET(Not in Education,Employment or Training)

学校にもいっておらず、就業にもついていない若者

1993年 40万 → 2002年 60万人

- ・10年以上も前から無業の若者が相当数存在していた
- ・社会の中で顕在化し、社会問題として認識されるようになった
- ・30歳前後の壮年のニートの増加

- 200万人超のフリーター

1982年 50万人 → 2000年代 200万人 (厚生労働省)

学歴別フリーター構成比

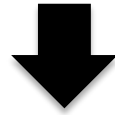
中卒、高卒 → 男性 71.3% 女性 65.0%

大卒 → 男性 12.5% 女性 8.0%

学歴の低い人がフリーターになる確率が高い

- 生涯賃金の比較

パート労働者	4637万円
常用の非正規社員	1億426万円
正社員	2億791万円



—生涯に何倍もの所得格差が生じる

- フリーターとニートの将来

フリーターの平均年収140万

→最低限ギリギリの生活ができる程度の所得

家族を持ち、子供を持つ生活一般的なライフスタイルは難しい

ニートは働かず所得を得ていない

→何らかの理由で親がいなくなった場合に、一気に貧困層へと

転換してしまう。またこのような人が現在60万人もいることも

深刻な問題である。

# 4 階層の固定化と人的資源の危機

- 格差拡大、不平等化の進行は階層の固定化に繋がる恐れがある
- 目指していたはずの競争の活性化は、逆に抑えられてしまう
- 政治家の息子とプロ野球選手の息子
  - 現在、政治家のかなりの数が2世、3世議員である
  - プロ野球選手の息子は、親の功により、他の選手よりも機会が与えられ、プロ野球選手になるには有利なポジションを与えられたと言える

## 政治家とプロ野球選手の違い

プロ野球選手 → 親の地位が最初の段階で有利に働いたとしても、その後の息子の地位は本人の能力と努力次第

政治家 → わかりやすい形で息子の能力を判断するのは難しい



- 階層の固定化をどう考えるか
  - その地位、職業に適していない人が、親の力を背景にその地位、職業に就くことが競争の活性化に繋がるのか
  - 本来、政治家にふさわしい人が、はじめから政治家になる機会を与えられていなかったとしたら...
  - 人的資源の活用の問題
  
- 階層社会について
  - 階層が固定化し、本人の意思、能力が反映されない社会は望ましい姿ではない
  - 日本社会は現在、階層社会に向かいつつある
  - 格差拡大により、日本を階層固定社会に誘導するのか、あるいは階層固定化を緩和させるために、格差を是正すべきなのか

# 5 格差をどこまで認めるのか

- 格差は必ず存在する（能力、健康、性格など）

どこまで格差を容認するかが問題

- 二つの考え方
  - ① 格差の上層と下層の差に注目する考え方
  - ② 下層が全員貧困でなくなるためにはどうすればよいのかという考え方

- 有能な人が報われる社会
  - 有能な人、頑張る人が意欲を持てるようにすることは文化や技術、経済の発展に貢献する
  - 競争が追求されるが、競争には必ず勝者と敗者が存在する
  - 敗者をどう扱うかが問題
  - 競争は機会の平等によって、全員が参加するべきである
- 格差と企業の生産性
  - 社長と一般社員の所得格差はどのように企業の生産性に影響するのか
  - トヨタは世界に冠たる効率性の高い自動車メーカーであり、アメリカよりも社長と一般社員の所得格差が低い
    - 社長と一般社員の所得格差は低い方がいいかもしれない